

# 桃李俳句集

平成十年から平成十五年までの  
句会より百八十句を選びました

## 一月の俳句

御慶の句齡二千の杉に寄す	楽人
刻々と除夜ぬぐい去る初日かな	重陽
元日や驢馬に揺られし聖家族	東鶴
屠蘇としていつもの酒をいただけり	童奈
初便りリハビリ友や生氣満つ	重陽
ほろ酔いているはがるたの輪の中へ	愛子
独楽回る八方の峰傾けて	芳生
初点前二十歳の膝の揃ひけり	りこ
偕老のにぎはひさりし注連の門	重陽
新世紀明けてなほ棲む焦がれかな	木菟
須臾の間に凧は宇宙の点となり	葉子
この星も旅人なるやミレニアム	ひとし
寒晴の白い鯨の跳ねるかな	十夜
冬木の芽けふ解かれんと天に在り	愛子
くちびるは笛吹くかたち春隣	明子

二月の俳句

白魚の腹一物もなく透ける

径

探梅の夜の衣を脱ぎにけり

清子

片栗の俯いて聞く雪解かな

晴雲

寒鰯のこつべ野太き出刃を研ぐ

重陽

薄氷の一はけ残る森の径

木菟

馬魂碑のうしろ渦巻く雪解川

りこ

朧夜へ踏出す異星の者のごと

洗濯機

冴返る五体に癌をちりばめて

英治

草餅を買いて真昼の汽車に乗る

省吾

惜しと思ふ嬉しと思ふ雪解水

海斗

沈丁花そのくれなゐの匂ふ時

悠久子

恋猫の嘆き聞きつつチョコを割り

葉子

本命に非ずのどかに贈らるゝ

木菟

テレビ見るより聴いてゐる風邪ごこち

悠久子

窓ふきの眼と眼があひしビルの春

絵馬

三月の俳句

戦争の遠くにありて種を蒔く

柊

太陽へイルカのジャンプ水温む

宏太郎

水温む窓開けがちに閉めがちに

清子

観覧車沖へ消えゆく春の船

芳生

手を振りて落第生の目深帽

やんま

紅梅や黒猫の来て去りにけり

香世

沈丁花指切りといふ忘れ物

洗濯機

野を焼いて胸の焔を治むかな

晴雲

笑はんと努めてをりぬ花の中

明子

かわづの目づかべて泥田ぬるみけり

雲外

春泥の小径を拾ひ逢ひたさに

木菟

瓔珞のかすかな揺れや雛目覚む

葉子

ぼつぼつと誘い会つごと梅開く

香世

探梅の声の過ぎゆく茶店かな

雲外

朧夜やこつこつ固き靴の音

葉子

四月の俳句

春眠の夢と知りつつ深入りす

清子

街騒を一刀両断つばめ来る

顎オツサン

投票の前に筍掘りに行き

彰

吊り革の大ゆれ小ゆれ春眠し

りこ

春泥に傘寿の恋の手をとらる

雲外

諫早のムツゴロウなり春の泥

丹仙

桜時冥王星へ行ったきり

しゅう

落花止まずバスに狐と乗り合はす

とびお

字ひとつ見守る位置に山桜

明子

寝ころべば蒼天へ散る山桜

海斗

花冷えやワインの澱を透かしみる

葉子

白子千一匹一匹に臍のあり

香世

杏咲く丘にカリヨン響きけり

旅遊

しばし手にのせて眺むる春の土

安寿

木蓮の今盛りなる廃家かな

重陽

五月の俳句

余花の雨母に会ひたき日なりけり

康

母の日の大きな傘の中に母

清子

新茶汲む敬語で礼を言ふ母に

眞知

今ごろは黄泉に居りしを更衣

ぎふう

古切符はらりと零る更衣

まよ

少女らは木の花のごと更衣

明子

山躑躅見て小屋掛けの轆轤首

絵馬

かくなれば燃ゆるほかなしつつじ山

登美子

白躑躅私は薄情なのかしら

愛

瀬音へと歩みすすめる五月闇

悠久子

若葉して櫂は天と戯るる

葉子

噴水の立夏の風に昵みをり

重陽

父もまた世に容れられず粽解く

葉子

青嵐過ぎて畳のやや湿り

葉子

桐の花空むらさきに染めにけり

旅遊

六月の俳句

掌のなかに今君が着き夏来る

明子

瓜ぶかり子の尻ぶかり大盥

馬客

時々は簾で仕切る心の間

雛菊

揖保川の舟と暮るるや鮎の宿

英治

鮎の背へ塩振り胡座組替へる

海斗

叱られに帰りたき日や額の花

明子

ミットより熱砂へ伸ばす指二本

海斗

蛍籠ラジオは長き恋の歌

洗濯機

豆飯を親しき羅漢に供へけり

旅遊

枇杷熟れて夕べは雨と決まりけり

旅遊

職退きし人がゆらりとあやめ見に

登美子

梅雨の闇盗人のこと老いは来て

葉子

竹林を縦に貫く驟雨かな

風人

糸とんぼせせらく音のするばかり

楽千

笛花火鯨も泳ぐ月のなか

はる

七月の俳句

気掛かりなことには触れず帰省の子

英治

狐面茶髪にのせて祭笛

明子

校庭を横切ることゝも帰省かな

まよ

失職の父の一服雲の峯

英治

暮るるまで蝉取る兄の後を追ひ

眞知

水切りの石高く跳ね雲の峰

芳生

打水の後をなぞりし通り雨

省吾

かけ直す眼鏡重たし大西日

明子

落雷や原始の闇の広がりぬ

ゆきふね

痩せ猫と昼寝の僧の細きすね

葉子

サーファーに海傾きて入道雲

やんま

かりそめの逢瀬遠雷鳴り止まず

木菟

夏風邪のくらげとなりて漂ひぬ

かおる

まくなぎをまとひし牛の大悟かな

風人

梅雨明けの象に輪郭戻りをり

尚史

八月の俳句

トーストに山盛りのジャム終戦日

明子

地下鉄に走り込みたり盆の僧

浮遊軒

終戦日やさしく抓る嬰の頬

芳生

風すでに絹の手ざはり今朝の秋

明子

漆黒の闇に彫り込む大文字

愛子

星飛ぶや浜に埋もるる亀の夢

梵論

夕立や無口の庭師粗茶すする

水

病む人の汗拭ひやる今朝の秋

葉子

終戦忌候文の父の遺書

徳子

夏泊まり重ねし吾子は日の匂ひ

絵馬

床屋過ぎ豆腐屋を過ぎ虫の闇

天藤志織

夏休み祖国に往くと、老司祭

絵馬

雌蝉の鳴けぬ想いも蝉時雨

暮仇

盆の入り男の折たる鶴一羽

心太

夏風邪やハスキーヴォイス童女めく

木菟



九月の俳句

十六夜や義足をほると脱ぐ少年

ぎぶう

回転ドア出て秋風となる女

顎オツサン

寄り添いて試歩ゆつくりと秋日傘

愛子

母の膝たたみて薄し良夜かな

愛子

背に月を纏ひて帰る湯治かな

丹仙

子の塚へ影さしのべて夜のすすき

馬客

命もていのち毀つや虫の闇

明子

国引きの出雲へ飛びし穂絮かな

りこ

そのかみの自爆要員敬老日

鞠

牧の霧消えゆく牛の巨き尻

葉子

霧の中人との距離の落ち着かず

香世

綾藺笠揺れて廻りて風の盆

旅遊

秋つらら顔をはみだす欠伸かな

たにし

幾億の過去を集めて星月夜

暮仇

予言書の見事外れて梨を食ふ

暮仇

十月の俳句

さりげなく耳は子を待つ夜寒かな

童奈

独り身は嘘だと云へず十三夜

晴雨

山ぶだう鳥になりたき日もあらむ

梨花

臥す老母に鏡合はせる今日の月

愛子

更待の窓の下ゆく子守唄

りこ

月今宵海に金糸の帯を解く

晴雲

巨きものたつつ如く芒原

重陽

酒蔵の乱るる甕後の月

暁生

ザビエルも立ちし御堂や菊匂ふ

絵馬

濁り酒捨てし故郷のふと見えて

葉子

あけび熟れ内緒のことを聞きし夜

香世

落暉いま峠の芒燃えたてり

旅遊

萩むらが刈られて風は道をかえ

葉子

秋風に地図を飛ばしてしまひけり

楽千

秋の山緑それぞれ錆びにける

重陽

十一月の俳句

冬紅葉二人の歩幅揃ひけり

虹子

大人びたお辞儀をひとつ千歳飴

素人

冬雲や数へ七つの初化粧

佳音

入院の朝音高く葱ぎざむ

明子

炉話の途切れし酒を父に注ぐ

馬客

指相撲くしゃみする間に負けてをり

葉子

許したるその気はあんねん 柿吊るす

旻士

時雨るるやみな半眼の野の地蔵

愛子

日向ぼこ猫のとなりで爪を切る

省吾

死に遅れなどと云うまじ冬の虫

旅遊

時雨忌や六腑に沁みる梅の粥

絵馬

小春日や鮎釣る浮子の揺れもせず

暮仇

交渉の相手は二代目鮫鱧鍋

香世

板の間に喝跳ね返る寒稽古

安寿

翁忌や市に見えし守宮をり

重陽

十二月の俳句

忘るてふ癒しもありぬ冬の草

芳生

初雪に目覚めし山の高さかな

登美子

初雪や妻の墓前に靴のあと

葉子

晴々と一文なしや年の市

ぎぶう

父に似し羅漢と語る去年今年

徳子

日本の明日を買ひけり年の市

海斗

湯豆腐や逆らわずに生き退職す

香世

恋文は手袋はずして投函す

夜宵

会堂に堅き木椅子や聖夜劇

明子

馴鹿の橇の飛び越す冬銀河

葉子

書を読まぬ乙女ら多し一葉忌

旅遊

日溜まりの猫のあくびや落ち椿

葉子

浮き島に並びて鴨の胸丸し

香世

寒靄の鐘幾重にも京の宿

重陽

風花や唇に触れふつと消え

葉子